反イタリック錯視

郷原皓彦1, 2・米満文哉3, 4・佐々木恭志郎5・吉村直人4, 6・山田祐樹6

1大阪大学, 2立命館大学, 3中央大学, 4日本学術振興会特別研究員,
5関西大学, 6九州大学

解説

スライド2枚目に，ある統計結果が記述されている。この統計値の箇所のみを抜き出して並べたものがスライド3であり，上から順に正立 (傾き無し)，左向きに10°の傾き (反イタリック)，右向きに10°の傾き (イタリック) となっている。反イタリックとイタリックとで傾きの度合いは同じであるが，反イタリックの方がより傾いているように見える (スライド4枚目)。この効果は傾きを20°とより大きくした場合でも (スライド5枚目)，またフォントを全てMSゴシックに変更した場合でも生じる (スライド6枚目)。

日本語では横書きの文章を左から右へ読むが，読む際の眼球運動の方向と逆向きに傾いた文字に対してより傾きを感じるのかもしれない。漫画や広告など文字を傾けたデザインは日常生活で多く見られるが，その傾きの量のみならず向きによっても読み手の感じる傾きが異なることを示した点にこの錯視の意義がある。

連絡先

郷原皓彦

gobara（at markに置き換えてください）hus.osaka-u.ac.jp